

# 産業研究所第1期の特徴(産研史断想 その2)

狩 野 博

産業研究所の歴史は、これを現時点で大きく時期区分するならば、1978年度中を設立期とし、79年度以後88年度までの10年間を第1期とすべきであろう。これは産研の設立に準備委員として参加し、その後事務担当所員の一員となり、八九年度以後13年間所長を務めたものとしての率直な実感である。今後産研がさらに存続・発展し、その時点から歴史が見直さなければならなくなるのは当然である。今回の記事はこの多分に独断的に区切った第1期についての回想の断片である。この期間中に所長は初代の小田橋貞寿先生(商学科、中小企業論)から小平隆雄先生(同、労務管理論)、石井金之助先生(経済学科、経済政策論)、吉村朔夫先生(同、社会政策論)へと順次交代した。いずれの先生方も未熟な事務担当の意見をよく聞いてくださり、温情をもって産研全体を統率して下さったことに、改めて深く感謝しなければならない。

この時期の所長の選出はすべて、「規程」に基づき経済学部教授会で行われた。この選任の方法は、「評議員会」の構成要件もそうであったが、多分に便宜的であり、経済学部の付属機関という性格が強く、後に予算との関係で問題となるのである。

## 1. 研究所室の確保

79年度から産研の実質的な活動が手さ

ぐり的に 小田橋先生はこの状態をいみじくも「五里霧中」と表現した(『通信』 1)

始まったのであるが、共同研究を行うにも、所員会議を開くにも、ある程度以上のスペースをもった独自の部屋が保証されていないという不備・不便に直面しなければならなかった。そこで学校当局の窓口であった北垣忠雄教務部長と相談の上で図書館長と交渉し、図書館2階の一室を提供してもらうことになった。ところがそこは、所員の研究室から離れていて日常の利用には不便であったため、実際に使用した記憶が全くなく、所長室(個人研究室)と経済学部の資料室(会議室)や談話室が適宜使われるという具合であった。そうこうしているうち、いつのことか正確には思い出せないのであるが、其中館(当時この建物に経済学部教員研究室が集中していた)地階の就職部事務室が移転し、その後の利用が決まっていなかったという情報が岩井研究員から(であったらと思う)もたらされた。事務担当所員一同がその空き部屋を早い者勝ちに研究所室にしてしまおうと一決直ちに行動し、事務机や応接セットを運びこんでしまった。この行為にどこからか苦情が出た記憶がないので、そのまま黙認されたのであろうと思う。教務部長と相談した経緯もあるので、管理者側の配慮もあったのかもしれない。いずれにせよその後、20人程度の人員が着席でき

るような机・椅子や書棚が徐々に整備され、20年以上に及ぶ期間の研究所室が確定することになったのである。今から思えば何んともおおらかな話であった。

## 2. 専属事務職員の確定

この時期の後半に至って、規程にもある専属事務職員が採用され確定したことも特筆に値しよう。これによって日常事務が恒常的に安定的に行えるようになったのである。研究活動は始まったが、当初主な事務は事務担当所員が分担して行い、事務員に任せる仕事もあまり多くはなかったこともあって、経済学部の談話室の職員が兼務していた。

研究所が其中館の地階に移ってからは、談話室はその2階にあったので、研究所の仕事があるときには、若い職員がその間を忙しく行き来していたのを思い出す。職員が若くて幸いであった。その後、最初の専属非常勤職員が配属されて来たのであるが、談話室職員と同様にその職務は用務員であったから、その能力に問題や限界があり、事務職員に配当すべき事務が増加しても事務担当所員の負担は軽減されなかった。

産研としては事務職員を要求し続けたのであったが、84年のいつのことであったか、別の用事で教務部長に会ったとき、唐突に「産研の事務職員が決まったよ」と告げられた。それがその年度以後20年近くの間、非常勤ではあったが産研専属事務員として勤務することになった茂木瑠璃子さんであった。教務部長によれば、茂木さんは家庭の主婦で事務の経験はそれほどないが、研究事務を担当できるというのが採用の条件になっていて、自分が面接して採用したのだから間違いないと、おおいに

自信ありげな様子であったのが印象に残っている。事実、研究所事務に慣れるまではかなり苦労したようであるが、知識欲が旺盛で、何かと難しいところの多い大学教員を相手に無難に対応することができ、所長や年配の所員だけでなく、若手の所員の間で人気と信頼が高くなったように思う。「産業研究所の茂木でございます」という電話の取り次ぎが、産研の存在を象徴するものの一つになっていくのであった。

## 3. 「研究部会」と「研究サロン」

産研の集団研究は(その1)でふれたようにこの二つの方式の活動を柱として進められることになった。

このうち「部会」は当初、そのテーマの設定と構成員をアンケートを基にして決めようとしたのであるが、期待したような所員の反応がなく、出だしから困難に直面した。やむをえず、事務担当所員全員が中心となって、とりあえず山崎隆三編『両大戦間期の日本資本主義』上・下、大月書店の輪読会をもって始めざるを得なかった。この著書が当時出版されたという事情もあったが、「両大戦間期」の日本経済の再検討というのは社会科学関係の学会の中心的なテーマの一つであったから、所員共通の問題意識を学会などの到達水準に照らして確認し合うという意図が大きかったと思われる。事務担当所員の間でさえ、経済の分野では歴史と政策、さらに経営学と産業技術論と専門分野が分かれ、統一テーマの設定は簡単ではなかった。そこで、歴史と現状をつなぐ時期として「両大戦間期」が選ばれ、「部会」の集団研究を確定するための準備をしようということであったと思う。

最初の研究報告を永瀬所員が、2回目

の報告を私が行ったことは『通信』の 1と4で確認することができ、後者の号によれば「部会」の名称が「産業・経済構造研究部会」となっているので、輪読会を続けながら「部会」の結成と存続の努力がなされたことは確かだが、その後どうなったかは判然としない。「研究部会」は中断してしまったのであろう。

茂木さんが職員に就任した84年度中に、石井金之助先生をリーダーとして、「共同研究」の分担が8人の所員の間で行われた。これは「部会」形式の集団研究の復活ではなく、所員の有志全員を一つの「共同研究」グループにまとめ、個人責任で設定したテーマごとに、定例的に研究発表を行っていくという方式への転換であった。これは個人の研究発表とそれを中心とする所員の交流であり、研究会は定例化するが統一テーマの系統的な継続ではなくなり、「研究サロン」との明確な区別がつかなくなってしまう危険があった。石井先生は産研の内外でかねてから「引き裂き理論」を提唱されていて(『年報』創刊号、1981年)、所員の間での関心も高く、影響力も大きかったから、「共同研究」を方向づけ、個人研究を統合することができたのではないかと思う(この年度の8月小田橋先生が逝去された)。

もう一つの研究活動の柱である「サロン」の運営は順調で、活発であった。「部会」や「共同研究」と比べ、純粋な研究というには難があるが、必要と条件があればその都度自由に、経済学部の新任教員の紹介、留学・海外旅行の報告、他学部教員や職員による話題の提供、学外研究者の講師招聘など、多彩な人材による話題が気軽に設定できたので、学際的な、また実際の知識と研究の交流の場として当

初からの予定通りに成功したといってよい。「サロン」は集団研究の一方の柱という以上に、『通信』の年3回程程度の発行の定着と相まって、産研活動全体のこの時期の中軸となったのである。

#### 4. 工場・研究所の見学

この時期の産研活動の特徴として忘れることができないのは、厚木ナイロンの見学から始まった工場や公私研究機関への訪問を意識的に追求したことである。厚木ナイロンについては、永瀬所員の見学記があり(『通信』 5)、私も簡単に言及したことがある(同 50)が、当時すでに厚木工場は製品開発の研究所と試作品の製造機能に特化していて、製品工場は地方へ分散・移転してしまっていた。短大家政科の先生方に参加を呼びかけたところ、被服関係の先生方がこぞって参加されたのが強く印象に残っている。研究活動の学内におけるリーダーシップが発揮され、産研への理解と協力が広がり深まるのはこういう機会を通じてであることを実感したのである。また、研究員からの説明の中で、ストックングのシームレスやはずれの防止などの厚木の特許が糸を「ひねる」とか「絡ませる」といった単純な工程にかかわるもので、製造技術の進歩改良が科学的研究と計算の精密さに依ることは当然として、作業の経験と熟練にもよることの大切さを改めて知ったのも大きな収穫であった。池貝鉄工の場合、この会社は機械の製造では定評があるのだが、自信のある刃物など素材加工にはあまり付加価値がつかず、電機・電子関連企業に付加価値を奪われてしまうという説明が印象的で、厚木ナイロンも同じような条件下にあったと思われ、その経営の難しさを思わざるを得なかった。

その後、横浜税関、筑波学園都市(通産省工業技術院)、町田市内にある三菱化成生命科学研究所などの見学が行われたのであるが、後者については『通信』に見学記があるので繰り返さない。これらの見学活動は、所員と学内の教職員の見聞が広がり、研究交流の契機ともなり得るであろうから、三菱化成を最後に途切れてしまったのは残念である。たとえば相模原市内にある宇宙・航空研究所などの見学などを復活させてみてはどうであろうか。

以上、産研第一期の活動を断片的に書き留めてきたがここで敢えてまとめようとせず、次の第2期の活動を明らかにするときに、まとめと言いついた問題を補足したいと思う。